

contents

メディアの性情報と性情報リテラシー	1
新連載 性教育の歴史を尋ねる①	7
北丸雄二のニューヨークレポート②⑤	8

「ありのままのわたしを生きる」ために②⑤	9
今月のブックガイド	10
JASEインフォメーション	11

メディアの性情報と性情報リテラシー

—— 性教育にメディア・リテラシーを ——

メディアジャーナリスト 渡辺 真由子

はじめに

「メディア・リテラシー」とは、「メディアの特質、手法、影響を批判的に読み解く」能力と、「メディアを使って表現する」能力の複合である。1987年に世界で初めてカナダが学校教育に取り入れ、現在は欧米諸国を中心に様々な国が教えている。日本においては、文部科学省の学習指導要領にメディア・リテラシーに関する規定はいまだ明記されないものの、国語科や技術・家庭科などで情報の読み解きを教える動きがある。

メディアが発信する多種多様な情報のなかで、青少年に与える影響が相当に強いと考えられるものが「性情報」である。性的な内容を扱う雑誌や漫画、アダルトビデオ（AV）の氾濫に加え、近年はインターネットの普及により、青少年が性情報を目にする機会は増大している。果たして、いまの青少年はどのような性的メディアに、どの程度接しているの

だろうか。また、メディアから得た情報を、自らの性意識・性行動にどう反映させているのだろうか。

この問いを検証するため、筆者は東京都内の複数の大学に通う男女計141人を対象に、性とメディアをめぐる様々な事柄についてアンケート調査を行った。さらにそこから男女数人を抽出し、個別にインタビュー取材を重ねた。本稿ではその結果の一部を報告するとともに、性教育にメディア・リテラシーを導入することの必要性について考えたい。

子どもの性的メディア利用の現状

1. 初めて性的メディアに接した時期・きっかけ

メディアの性情報が青少年に与える影響を検討するにあたり、まず押さえねばならないのは、彼ら彼女らの人生に性的メディアがどの程度浸透してきたか、という点だ。情報は蓄積されるものだからである。

アンケート調査によれば、いまの大学生が初めて

性的メディアに接した時期は、男子は小学5年生未満が54%、女子は小学5年生未満が30%で、いずれもトップである。小学校高学年から始まる学校での性教育をめぐり、「性に関して何も知らない子どもたちを刺激し、『寝た子を起こす』のではないか」との議論が教育界には根強いが、子どもたちはとくに目覚めている。

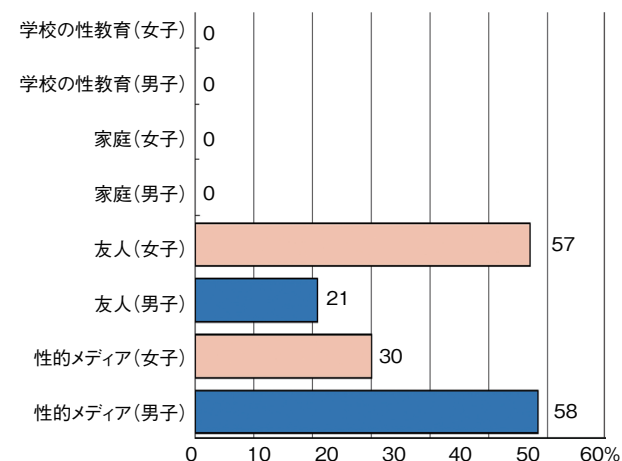
性的メディアに接したきっかけとして多いのは「拾得」だ。「小5のとき、友達が公園で拾ってきたAVを小学校の教室で回していた。女子の間でも回されていた」(男子)、「中学1年生のときに拾った成人雑誌で、女性器の実物を確認した」(男子)、「中学に上がると、クラスの男子が拾ったエロ本を見せてもらったり、男子の部屋へ女子みんなで遊びに行行ってAVを観賞したりするようになった」(女子)などの声が寄せられた。性的メディアが、街なかに無責任に放置されている状況が伺えよう。

青少年がより直接的に、性的メディアを入手するケースもある。露骨な性描写のあるビデオや雑誌は18歳未満への提供が禁じられているはずだが、アダルトビデオの場合「兄の会員カードを使い、体の大きい友人に借りてもらった」「古本屋で中古のAVを買った。選び放題でしかも安い」(男子)、成人向けの雑誌やコミックの場合『あの書店は厳しくないので売ってくれる』という情報を友人間で共有していた」(男子)などの抜け道がとられている。青少年に対する業界の「自主規制」は、あまり有効に機能していないようだ。

自分専用の携帯電話を持ち、インターネットを使える環境にある青少年の場合は、さらに労せずして性情報に接している。「ネットだと無修正の裏モノにアクセスしやすい。1回見てしまうと、さらにそれを求めてしまう。モザイクがかかっていると物足りなくなる」(男子)といった声の他、「アダルトサイトでワンクリック詐欺の被害に遭った」「ウイルスに感染した」(男子)等のトラブルも報告された。

一方、「家庭」が我が子に性的メディアへの接触機会を与えてしまうこともある。「父親の通勤鞆から成人向けグラビア雑誌を発見。汚らわしいと思った」(男子)、「中1のとき、『お父さんが家に隠しているAVを見つけた』と友人が言うので女子だけで鑑賞会を開いた。その友人はショックを受けてい

図1 性交渉の最大の情報源



た」(女子)といった事態が発生している。児童虐待防止法は、子どもにポルノを見せることを「性的虐待」と定めている。いくら親が、我が子が性的メディアを持っていないか目を光らせても、自分の所有物を見つけれられては意味がない。

2. メディアの「性の教科書」化

実際に青少年が性交渉をするとき、最大の情報源となるものは何だろうか。図1で示すように、男子の場合、「性的メディア」を性交情報の拠り所としている学生が約6割と、圧倒的に多い。対して「家庭」「学校の性教育」を情報源として挙げた者はゼロだった。性教育が10代での性交渉を抑制する立場から行われてきたためか、「実用的」とは評価されないようである。家庭でも性に関する情報提供が十分になされず、青少年が性知識をメディアで埋め合わせざるを得ない現状が浮かび上がる。

A男(23)は中3の時、交際していた同級生が乗り気ではないにもかかわらず強引に迫り、初体験を遂行した。「女は恥ずかしがるフリをするから、男が大胆に行け」などと書かれた恋愛マニュアル雑誌を参考にしたのだという。「親や学校は教えないので、メディアの存在が大きかった。自分に体験がないと、メディアからの情報が嘘か本かが判断できない。判断基準がないし、判断する余裕もなかった」と振り返る。

女子の場合、性交情報は「友人」から得るという者が57%で最も多く、男子の21%の倍以上に達する。一方、男子が最大の情報源とした「性的メディア」は、女子の30%にしか利用されていない。

この逆転現象から、女子には男子よりも、性に関する話題を活発に話し合う傾向のあることが推測される。もっとも、友人からのクチコミも、結局はメディアの情報に基づいている可能性は否定できない。ここでも「家庭」と「学校の性教育」は機能していない。性的メディアが、まさに青少年の「性交手引書」と化しているのである。

3. 接触する性的メディアの種類・頻度

「頻繁に接する性的メディア」について複数回答で尋ねたところ、男子はネット上のアダルトサイト利用者が実に92%を占めた。「お金を出してまで性的メディアを買いに行く必要がない」「手軽だから」「利用しやすく便利だから」などの理由が挙げられた。続いて多いのはアダルトビデオ利用で、46%に上った。

性的メディアに接する頻度についても尋ねた。「週4～5日」という男子が38%と最も多い。性的メディアは、すっかり彼らの日常に浸透しているといえよう。2番目に多い回答は「週2～3日」で29%。「毎日」という男子も21%いた。

女子に関しては、男子とは異なる特徴が見られる。男子が頻繁に目にする「アダルトサイト」と「アダルトビデオ」を利用する女子はいずれも9%、4%と極めて少なく、逆に男子ではゼロだった「ファッション雑誌」の利用が、女子では約4割でトップとなっている。女子向けのファッション雑誌は定期的に「性に関する特集」を組むためだ。「ファッションを見たくて買った雑誌に、おまけ的な感じでセックス特集が載っているの、見てしまう」といった声のほか、「勉強のために読む」と答えた女子もいた。

女子もアダルトサイトやアダルトビデオといった映像媒体に興味がないわけではないが、入手方法や内容面で壁を感じている。「商品のパッケージや表紙にでかでかとわかりやすくポルノに関わる言葉が書いてあればレジに持って行きにくいし、店員が男性だったり、周りに男性客が多かったりすればもっと買いにくい」「ポルノを見たいとは、あまり人と言えない」等の声が寄せられた。内容についても、「女性に対して屈辱的なことばかりしている（性的暴行、盗撮を演じるなど）ので、見る気にはならない。女性を何だと思っているのかと、憤りを感じ

る」「表現がエグい。リアクションが過剰」等の批判があった。

男性が性欲を露わにしても「男として当然」と受け入れられるのに対し、女性がそうすれば「女のくせにはしたくない」という目で見られる風潮はこの社会にまだ残り、アダルトメディアもほとんどは男性向けに作られている。女子学生もこうした規範を感じ取り、露骨な性的メディアへ手を伸ばすのを自制すると考えられる。

性的メディアに接する頻度は「月2～3日」という女子が35%で最多だが、「週1日以上」の割合で目にする女子も4人に1人に上った。

メディアの性情報の特徴と子どもの性意識・性行動に与える影響

1. 初体験の時期・経験人数

ここまでの調査で、いまの青少年が低年齢時から性的メディアへの接触体験を積み重ねていることが明らかになった。では、メディアから吸収した性情報は、彼ら彼女らの性意識や性行動に何らかの影響を及ぼすのだろうか。

初体験についてA子（21）にインタビュー取材を行ったところ、「私も結局、まあいいやと思ったんですよね」との答えが返ってきた。

A子に初めて彼氏ができたのは高2の時。1か月も経たない時期にドライブに誘われ、気軽に乗りこむと、車はラブホテル街へ。嫌悪感がわき起こったが、「もう高2なんだから、そろそろエッチしないと」との思いが背中を押した。A子が愛読していた雑誌の読者アンケートには、初体験年齢の1位が「15歳」と紹介されていたという。「そういう話を読むと焦るといえるか、私も早くエッチしなきゃいけないのかな、と思うようになりました」

女子が中学生頃から読み出すファッション雑誌には、「初体験の年齢」や「これまでに付き合った人の数」などに関する読者アンケートの結果がよく掲載される。社会心理学用語に、仲間と同じように行動せよとのプレッシャーを与える「同調圧力」がある。周りから浮きたくないと思う思春期には特に、このプレッシャーを受けやすい。A子もメディアによって同年代女子の性行動に関する情報を与えられ

たことで、無意識のうちに同調圧力にさらされたと
思われる。

性交渉の経験人数にも、メディアの影響が見られる。B男（21）は、合コンで知り合った女の子たちと一夜限りの関係を重ねる。ファッション誌のナンパ特集で、次々と女性を口説く男性の姿に憧れたのだという。「そこまで単発の関係を望んでいるわけではないのに、友達に自慢したいがために頑張っているところがありますね」。

男性向けファッション誌は、「男ならガンガン女を口説け」という論調が主流だ。女性のタイプ別に「落とし方」を指南する特集や、ナンパの勝率を上げるコツなどが頻繁に紹介される。「1人の女性とじっくり付き合うよりも数をこなすこと」を「男らしさ」に結び付けるメディアに、突き動かされる男子もいるようだ。

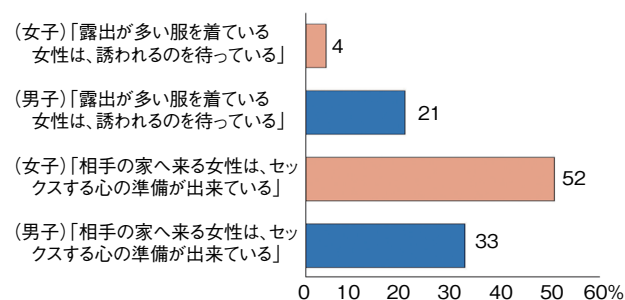
2. 「露出服」の意味

C男（21）は女の子とデートするとき、まず相手の服装をチェックするという。「露出度が高い服を着ている場合は『あ、こいつやる気かな』という目で見ちゃいますね。雑誌にもそう書いてあったし。こっちも欲情してその気になります」。

「女性の『性交 OK サイン』をいかに見抜くか」は、男性向けメディアの永遠のテーマである。40年ほど前の『プレイボーイ』（1973年11月20日号）に、「女性の言葉、行動、目の輝きで分かる突撃の合図！」という特集が早くも登場している。なかでも、ミニスカートや胸の開いた服装は「大いに期待できるサイン」と指南されてきた。

「女性の OK サインとして参考にするメディア情報」を尋ねたアンケート調査（図2）によれば、露出が高い服を「OK サイン」と考える男子は21%に上る。ところが、自分の露出にそのような意味を込める女子は4%に過ぎない。「露出に深い意味はない。好きな服を着ているだけ」「露出イコールその気があるとは、つながらないと思う」などの反論が女子側から寄せられた。「私は肩を出す服装が好きだが、夜遅い時間に外を歩かなければならない時は1枚はおるものを持っていく。男友達と2人でドライブに行く時も、ミニスカートを履きたければ膝掛けを用意する。露出で誘っていると思われたら困る

図2 女性の OK サインとして参考にするメディア情報



ので」と、自粛する声もあった。

女性がどのような服を着るかは「好み」による部分も大きい。脚線美が自慢ならミニスカートを履きたくもなるが、必ずしも挑発しているわけではない。露出した肌を「見せびらかす」ことと、実際に「触らせる」ことには、雲泥の差があるためだ。

しかし、こうした心理は男性向けメディアにはわかりにくいようで、痴漢の被害に遭った女性を「露出する服を着ていたのが悪い」と逆に責める風潮すらある。勝手な誤解は、女子から服装の自由を奪いかねない。

3. 家に来るのは「暗黙の了解」?

「露出服」と並んで誤解が発生しやすいのは、「家で2人きりになる」という行為だろう。D男（22）は大学1年のとき、合コンで出会った女の子の家に招かれ、「この子、エッチしたいのかな」と期待がふくらんだという。「中高生の頃見ていたテレビで、『家で2人きりになったら、やらなきゃいけないしょ』と、お笑いタレントたちがよく発言していたんですよ。そんなもんかな、と思ってました」。ところが、いざ彼女に迫ったところ、強く拒否されてしまったという。

家へ呼んだり、呼ばれたりすることが性交 OK を意味しているという「教え」は、雑誌などの恋愛マニュアルとして、あるいはドラマや映画、漫画のストーリーなどの形で、特に男子たちに刷り込まれている。こうしたメディアは、「女性に嘘をつく」ことを推奨する。建前は「映画鑑賞」や「飲み直し」との名目で誘おう。でも家に来る女性にはその気があるに違いないから、押し倒しちゃって大丈夫……。

前掲のアンケート結果（図2）では、「家へ行く」ことを OK サインと考える女子は52%と、男子の

33%を上回る。一見意外だが、実は多くの女子は自分の経験から、これがOKサインだと「学んだ」のだという。女子たちからは以下のようなコメントが寄せられた。「1人で男性の家に行くと必ず誘われるから」「男友達の家遊びにいったときに迫られたから。まさかとは思いましたが」「付き合っていない先輩の家に行ったときに迫られた。しつこかったけど嫌がったら解放してくれた」「友達の家でさえも誘われ、気まずい思いをしたことがあります」等。

すなわち女子側には、最初はごく無邪気に相手の家へ行く者も多いことがわかる。だが、男子側の誤解により、深刻な事態が発生するケースもある。次項で詳しく見ていきたい。

4. 「女性のノーはポーズ」か

B子(19)は、「映画のDVDを見よう」と言われて同級生の男子の家へ遊びに行った。一緒に横になりながら映画を見ていると、背後にいた彼の手が徐々に体に触れてきた。冗談かと思っていたら、本気だった。「彼は『大丈夫だから』とだけ言って、ことを進めていきました。少し抵抗したけれど聞き入れてもらえず、仕方なく許しました。でも、全然幸せではありませんでした」

顔見知りの相手による合意のない性交渉は、「デートDV」の1つである。

今回の調査で、女子学生たちの口からデートDVの被害体験が次々と出てきたことに、衝撃を覚えた。アンケートに噴出した訴えからは、女性のノーが尊重されていない実態が明らかである。「嫌だといっても聞いてくれなくてとても不快だった。私の気持ちより自分の欲求が大事なのかと、幻滅した」「私は2人でゆっくり話をしたり、眠ったりしたいのに、手を出してくる。嫌ではないので応えるが、あまり度が過ぎるのは嫌気がさしそう」「寝ている時に無理やり迫られた。泣いてもやめてくれない」「初体験のとき、そんなに好きじゃない彼氏がどうしてもというので、根負けした」「ノーといっても本気のノーとは気づかず、エッチしようとしてきた」「とにかくムカついた。こっちのことは何も考えてない。自分の性欲だけで迫ってきた」「家にいたときに強引に誘われた。抵抗したが、無理やり手

をまとめられた」。

E男(21)は大学2年生のとき、合コンで知り合った女の子を家へ連れてきた。家へついてきたからには性交OKだと思い迫ったところ、「えー、やだ」と断られた。彼女の「ノー」を額面通り受け取っていいものかどうか、E男は一瞬迷ったという。「雑誌に『女性が嫌がるのはポーズ』と書いてあったんですよ。AVだって、大体女性が嫌がっているところからスタートする。嫌がって、でも脱いだらそのうち乗り気になってくる、ってパターンが多いですから。だから彼女にノーと言われたときも、『これはいいのかな、いけるのかな』という考えが頭をよぎりました」。

女性は口では「ノー」と言っても性交を望んでいる、最初は嫌がってもだんだん気持ちよくなっていく……。こうしたストーリーは、AVや漫画に非常に多い。男性が女性に強引に迫る口実ともなる。メディアは、自分たちが無責任に発信する情報が青少年間のデートDVを引き起こしかねない現状を、深刻に受け止めなければならない。

5. 危うい避妊知識

避妊の方法についてアンケート(複数回答)を取ったところ、「コンドーム」の利用者が男子88%、女子91%といずれも1位だった。だが2位は、避妊効果はほぼないとされる「膣外射精」で、男子21%、女子17%となっている。男子からは、「膣外射精は避妊の一種かと思っていた。周りにもそう信じているヤツは多い。AVでしょっちゅう、その場面出てくるし。コーラで膣を洗うとか、女性がその直後に牛乳を飲めばいいとかもメディアで見聞きした」「AVを見ていてもコンドームを付ける場面はあまりないので、大丈夫と思ってしまう」等の声が寄せられた。

AVをはじめとする性的メディアは、往々にして避妊を軽視している。成人向け漫画では、相手の女性が挿入の時に「生でちょうだい」と言ったり、射精の時に「中を出して」と「お願い」したりする場面が多々ある。あたかも女性のほうがそれを望んでいるかのようなメッセージは、男性の理性を低下させよう。

一方、女子にも膣外射精の利用者は2割近くいる。「相手がそういう人だから。大丈夫なのか、少

し不安です」「彼氏はコンドームが嫌いだったので、我慢していた」「『ゴム着けて』って言って、場の空気が悪くなるのが嫌」等々。男子がメディアの情報を鵜呑みにして暴走し、女子も相手に流されている構図が伺える。

対策としての「性情報リテラシー」教育

1. 学校で性的メディア分析

「小3のときから雑誌で性情報を蓄積していた」「中高生のときに見たAVに『こうすればいい』と決めつけられた感じ」。インタビュー取材をした学生たちからは口々にこんな声が出た。彼ら彼女らが「性の情報源」をひたすらメディアに頼るのは、それ以外の情報源、すなわち正しい性知識を教えるべき学校や家庭がきちんと機能していないことの裏返しでもある。

文部科学省による学習指導要領は、中高生の保健の授業において「性情報への適切な対処」を教えよと述べてはいるが、学生たちからは、「男の先生は女子向けの話が恥ずかしかったみたいで、教科書を読み流しただけ」「女子校では性教育らしき授業がほとんどなかった」といったコメントが聞こえてくる。青少年の性意識・性行動がメディアに大きく左右されている現実を見れば、性情報をメディア・リテラシーの観点から読み解く能力の育成、いわば「性情報リテラシー」教育に取り組むことは喫緊の課題である。

授業では、子どもたちが実際に接している雑誌や漫画・AVを、教材として批判的に活用してみよう。なにも実物を見せる必要はなく、教師が口頭や文章でイメージを説明すればよい。指導のポイントとしては、性的メディアにありがちな男女の描き方のズレについて、ひとつひとつ指摘をしていくことだ。「女性が家に来るのはOKサイン」「女性のノーはイエス」といったメディア情報には誤解があることを教えねばならない。避妊知識がメディアに影響されていることも、具体例を挙げながら伝える。ある男子学生は「妊娠させたら堕ろしてもらえばいい」と考えていたようで、中絶が女性の心身に与える負担を筆者が伝えると「知らなかった」と絶句していた。「膣外射精に避妊効果はない」「中絶や性感染症

はリスクが大きい」などの点を、しっかり教え込まねばならない。

「ポルノを見ていても、誰がどうやってその情報を供給しているかなんて考えたことない」と述べる男子学生もいた。生徒たちに「作り手の意図」を考えさせることも大事である。「性的メディアの作り手は、『売れる』ために過激な表現や興味本位の情報を盛り込んでいる」「特に男性向けメディアは、現実の女性への配慮よりも、男性に都合のいい情報を優先している」といった背景を知らせ、情報を客観的に受け止められる目を養いたい。

2. 「性」にオープンな家庭づくり

性情報リテラシー教育は、学校に任せておけばいい、というものではない。前述のように、現状では学校の指導の質にささか不安がある。確実に子どもに教えるには、やはり家庭における取り組みが欠かせない。

ある男子学生は「現実AVとは違うんだからね」と母親から言われ、AVが演技だと初めて認識したという。「息子の部屋に成人雑誌を発見して動揺した」という別の母親は、「『こういう本と違って、生身の女性は性欲解消の道具じゃないよ。コミュニケーションが大事なんだよ』と思いきって息子に話した」と語る。

このようなやりとりができるようになるには、日頃から親子間で「女性と男性の性的考え方の違い」を話題にしたり、「性」をオープンに語り合える雰囲気作りが重要だ。性犯罪やセクハラに関するニュースを取り上げて、「女の子が露出した服を着ていたら、痴漢してもいいの?」「『女性が自宅に来たから襲った』とこの加害者は供述しているけど、どう思う?」メディアにもそんな設定の作品が多いよね」などと問いかけるのもよいだろう。

親は積極的に子どもを取り巻く性的メディアの現状の把握に努め、それらが発信する性情報の歪みを指摘したい。

「幸せな性コミュニケーションのあり方」を考えることは、「お互いを尊重し合う人間関係の築き方」について考えることでもある。メディアの読み解きをきっかけとして、子どもの「性」の問題に、正面から向き合ってみてほしい。

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第1回 連載のはじめに

もてぎ てるのり
女子栄養大学大学院栄養学
研究科保健学専攻博士後期
課程修了、博士（保健学）

今号から開始するこの連載は、前作「性教育の歴史を尋ねる」（『現代性教育研究月報』2005年5月号～2008年8月号連載）とこれを再構成して書籍化した『性教育の歴史を尋ねる 戦前編』（日本性教育協会2009年発刊）の続編にあたります。前作の発刊後、続編を期待する声を日本性教育協会へ寄せていただいた方々のおかげで開始されるものです。本連載で取り上げていく「純潔教育」ですが、今となっては、何のことだか分からない人のほうが多くなっているのかもしれませんが。昨年、ある大学の講義で80人くらいの学生に純潔教育という言葉を知っているかどうかを尋ねたところ、知っている学生は1人もいませんでした。知らない人は「ジュンケツキョウイク」と聞いて最初に「純血教育」という字を思い浮かべることが多いようです。そういう私も純潔教育という言葉を知ったのは、性教育を卒論のテーマに選んだ大学3年生のときです。一方、卒論の指導教授（1942年生まれ）が「僕は性教育より純潔教育のほうがなじみがある」とおっしゃったのを思い出します。現在では、ある年代以上の人か、性教育やセクシュアリティ等に興味のある人、…ぐらいしか知らない言葉になっているのかもしれませんが。

この純潔教育の一般的な意味は、性の純潔を目的とした教育のことで、この純潔とは、結婚までは処女・童貞を護り、結婚後の性交も夫婦内で行われることを指すことが多いようですが、一例のみあげれば、戦後期の性教育・純潔教育研究を牽引した心理学者の間宮武は「純潔を人はどのように考えようとも自由である。しかし、その人なりに純潔観が確立していることが大切である。」（間宮武『純潔教育の手引』牧書店1955年扉頁）と、人によって解釈が多様であるということ自体を定義にしておき、上記の意味で固定されているわけではありません。

また、この純潔教育という語は、戦前期の廃娼運動でも使用されていましたが、「純潔教育というのは、終戦直後使用されはじめた言葉で、英語のピュアリティからきており、終戦後の性の混乱があまりに激しかったので、これを浄化し青少年を不良化から守り、男女共学の弊を

除きたいと云う意図から、主として教育家あるいは、心理学者あるいは女性問題研究家などによって唱えられたものである。」（内田守『続純潔教育への情熱』金龍堂書店1956年p.36）というように、おそらく当時の多くの人にとっては戦後から使われ始めたという認識であったと考えられます。

戦後の性教育史を二つに分けるならば、1970年代前半あたりまでの純潔教育の時代と、それ以後の性教育の時代とに分けることができるでしょう。例えば、文部省（現・文部科学省）で純潔教育という語が使われていた期間は、文部省社会教育局が「純潔教育の実施について」を各都道府県宛に通牒した1947年から、「純潔教育と性教育とが同義語である」（文社婦第80号局長裁定「純潔教育と性教育との関係について」）と裁定した1972年あたりまでです。都道府県の教育委員会が発行した「性教育の手引き」類のタイトルでは、管見の限りですが、鹿児島県生徒指導連絡協議会・鹿児島県教育委員会『純潔教育の系統案』1956年が最初で、山口県教育委員会『純潔教育の手びき 高等学校資料編』1976年が最後です。その後、40年ほど経過していますから、現在、純潔教育という語を知らない人が多くても無理はないでしょう。

本連載では、1940年代後半から1970年代までを対象に、文部省の純潔教育政策に触れつつ、学校における純潔教育実践を取り上げていきたいと考えています。これまでの戦後性教育史研究は、文部省の純潔教育政策研究や純潔教育委員会メンバーの思想的研究、あるいは学習指導要領の研究が中心で、純潔教育実践そのものや各地方の「性教育の手引き」はあまり取り上げられていないように思うからです。性教育史研究としてのこの空白を少しでも埋めておくこと、また、戦後の民主化、その後の逆コース、さらには高度成長のなかで、純潔教育にどのような（ポテンシャルという意味での）可能性があったのか、さらに1970年代までに純潔教育の時代は終焉し性教育の時代へと展開していくことができたのはどのような背景や要因があったか、といった点に少しでも迫っていくことが、本連載の意義であると考えています。

GLSEN と GSA

——教師と生徒たちの取り組み——

アメリカでは自分の家族や親しい友人の中に同性愛者がいると答えたひとが最新調査で57%に達しています(CNN/ORC インターナショナル調べ)。2007年から12ポイントの上昇だそうです。それが報道された翌日の3月26日から連邦最高裁での同性婚合法化をめぐる最終審議が行われました。こちらも支持派は最近はやや過半数で、ワシントンポスト紙とABCの3月の合同調査では全米で58%でした。10年前は真逆で37%が支持、55%が反対だったのです。

これは性的少数者に寛容な若者世代がどんどん大人になって世論調査の中心層を形成してきているのが要因です。しかも同じWaPo/ABC調査では18~29歳層の同性婚合法化支持は81%。この流れが今後逆転することはまずないでしょう。つまり、あと10年もすれば「同性婚反対」という意見が現在の「異人種間結婚」に反対を唱える意見と同じくらい奇異なものに聞こえているはず。もっとも、最高裁の判断が今回どちらと出るかは予断を許しません。判決は6月にも予定されています。

若者たちにLGBTへの共感がもともと多いのかという点についてはそんなことはありません。イジメや自殺は多発しているわけで、この支持率の多さは「同性婚支持をノーム(規範)としなくてはいけない」という言説を繰り返し伝えている友人間あるいは教師やメディアによる教育の賜物だと思います。性的少数者や人間の多様性(人種、宗教、習慣)をめぐる人権問題は米国でもここ20年ほどでやっと主流論壇で論じられるようになったとても現代的な課題で、こういう問題への教育的アプローチはまだ教科書で定説化できるほど成熟していません。

ではどういうことが教育現場で起きているかというと、アメリカでは1990年に70人のゲイとレズビアン

の教師たちが集まってGay and Lesbian Independent School Teachers Network (GLSTN) という団体を創り、まずはこの人権問題の存在を認知させようという運動が始まりました。このボランティア団体は95年に常勤職員を置く全米組織となり、97年にはGay, Lesbian and Straight Education Network (ゲイとレズビアンとストレートの教育ネットワーク=GLSEN=グリセンと発音)と改名します。ゲイとレズビアンだけに限定せず、趣旨に賛同するストレートの教育者たちにも参加してもらい、影響力を拡大する狙いです。

GLSENが主導したのはまず全米の高校や大学にGay-Straight Alliance (ゲイとストレートの同盟=GSA) という生徒・学生組織を作り、同性愛・異性愛の生徒たちが一緒になってこの問題に関する情報提供と理解を図る環境をつくることでした。結果、90年には全米で2校にしか存在しなかったGSAはいまや全米で4000団体以上に拡大しています。

ところでアメリカでは実際にいま起きている政治問題や社会問題を教育現場で生徒たちに討論させることは珍しくありません。政治的な問題の教育や議論を回避する傾向のある日本とは大違いで、大統領選挙でも同性婚などの時事問題でも学校で教えなければどかが教えると言わんばかりに積極的に取り上げる教員が多く存在します。そういう教師たちやGLSENの後押しでGSAがカリキュラムに収まり切らない様々な学校イベントやワークショップを行っています。これが現実問題に対処する実地教育となっているわけです。

そんな中にDay of Silence (沈黙の日)、National Coming Out Day (全米カミングアウトの日)、No Name Calling Week (悪口を言わない週間)、Think Before You Speak Campaign (しゃべる前に考えようキャンペーン) などへの参加があります。

「沈黙の日」には全米で5000校の中学・高校の生徒たちが参加します。それぞれどういうことが行われるのか、次回のこのコラムで紹介します。(続く)

きたまるゆうじ ニューヨーク在住(20年)ジャーナリスト/作家/元・中日新聞(東京新聞)ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために



第25回

Jさんの揺れ

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のMtFトランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

数年前にわたしの勤務校をやめた子から、突然メールが来ました。「無事高卒取得しました！ 頑張ったよー(*^^*)。土肥ちゃんは元気??」という文面に卒業証書の写真が添付されていました。しんどいこともあるけど、うれしいこともある。そんな仕事です。

閑話休題。

わたしがトランスジェンダーとして生きはじめてことは、わたしをとりまく人々の心にさまざまな波紋を投げかけました。ある人はそれを拒否し、ある人は受容し、ある人は保留するという形でその波紋を受けとめました。しかし、一番大きな波紋を投げかけられたのは家族、なかでもパートナーのJさんでした。

1999年にわたしがJさんにカムアウトをした時、Jさんはわたしに、「そんなにスカートがはきたかったんや。そしたら外ではかずに家ではいたらええやん」と言ってくれました。当時のわたしは単純に「Jさんは受けとめてくれた」と思っていました。その当時のことを、Jさんは次のように書いてくれました。

「謙一郎君は、今、生と死の瀬戸際にいる。大事な謙一郎君を絶対に死なせてはいけない」ということだけが痺れた頭に浮かんだ。これが、その後の私のとるべき態度の大前提となった。自分にとって、謙一郎は、決してなくしてはいけない、かけがえのない存在であったのだ。そのために重要なことが4つあった。①私が否定しないこと、②子どもたちが否定しないこと、③互いの両親が否定しないこと、④周囲や社会が否定しないこと。それらは全部、④ですら私次第で可能だと考えた。私が周囲に認められる、社会的に立派な人間になればいいのだ。あの人が側についているなら間違いがあるわけではないと思ってもらえる存在になろうと考えた。私は、子どもたちにお父さんはとても偉い人だということを言い聞かせ、両親にはトランスによって困ることは何もないと説得し、積極的に地域起こしにもかかわっていった。

しかし、実際に家の中でスカートをはくと、Jさん

は「子どもたちが見ているからやめてくれ」と言いました。受けとめてもらえていると思っていたわたしはとまどいました。しかし、「子ども」という言葉には逆らえません。結局、一度は許してもらえた気になっていたスカート姿をあきらめることにしました。

今にして思えば、Jさんは揺れていたんだろうと思います。わたしを否定してはいけない。しかし、自分の気持ちに正直になると、やはりわたしにはトランスしてほしくない。さらに、子どもたちにとって、わたしがトランスすることがどういう影響があるかもわからない。そしてなにより、Jさんには相談する相手がいませんでした。なぜなら、Jさんがだれかに相談した瞬間、それはとりもなおさず、わたしのことをその人にアウトイングすることに他ならないということ。Jさんは知っていたからです。Jさんはひとりで考え、行動をしていました。

当時のわたしは、そんなJさんの気持ちに甘えていました。ほんとうは、そんなJさんと同じ時間と空間を共有し、たくさんの対話を積み重ね、Jさんを支えることが必要でした。しかし、おそらくは自分のことで精一杯だったのでしょう。わたしはひたすら「外の世界」を広げていきました。

ところが、肝心の謙一郎が家に帰ってこなくなりました。ちょうど謙一郎にとってもそういう時期だったのだが、当時の私にはわからなかった。愛しても願っても祈っても帰ってこない。私は、前のように帰ってきて、そばにいて、私を顧みてほしかった。けれどその時の謙一郎の気持ちは、外を向いているのでそれは叶わなかった。日ごとに謙一郎の心は、どんどん離れていく。

そんなある日、Jさんはわたしに「わたしの謙一郎君を返してよ！」と叫びました。わたしは絶句しました。もしも自分の身を引き裂くことで返せるならそうしたいと思いました。でも、一度心の箱のふたを開けてしまったわたしは、もうそのふたを閉じたくはありませんでした。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

性の境界

本書は性分化疾患（肉体において男女に判別しにくい状態で生まれてきた）と、性同一性障害（心とからだの性別が一致せず、身体に深刻な違和感を抱えている）の人々、そして、彼ら彼女らを取り巻く家族や医療関係者などを取材したノンフィクションである。

最初に個人的な感想を述べると、やはり、性をめぐる状況は20年前に比べると格段に進んだのだな、ということだ。私は90年代初頭に性の問題について書きはじめたライターであるが、当時はまだそうしたテーマの出版物は少なかったし、ましてや性的少数者を取り上げた本などないに等しかった。そんな状態のなかでトランスジェンダーやインターセックスについて話を聴くにしても、それを語ることのできる当事者はごく数人しかおらず、家族などからコメントをもらうことなど考えもつかなかった！

それが20年の歳月を経て、性同一性障害や性分化疾患を取り巻く環境が大きく変わったことをこの本は教えてくれる。新聞の取材にこれだけ多くの当事者や家族が応え、自身の意見を堂々述べている様子は、感慨深い。もちろん、彼ら彼女らの想像を絶するような苦しみや被差別体験は（本書が記すとおり）変わっていないのだろうが、それでも、言葉を共有する場が生まれ、問題を社会に発信してくれる大メディアが現れるようになったことは、大きな前進であり、救いであるに違いない。このまま、このような方向性で社会が進んでくれば、男女という「性別二元制」に身の置きどころがなかった人々の生き難さはじょじょに軽減されていくだろう。

しかし、この問題の複雑さはそれだけでも解消されない。例えば、性分化疾患の人々の性別を誰がどの段階で決定するのかというのは、容易に答えのない難問だ。誕生直後に、家族や医師などによって子どもの意志



境界を生きる 性と生のはざままで

毎日新聞取材班
毎日新聞社
1,365 円（税込み）

とは関係なく決めてしまえば、あとになって、本人に身体的／精神的違和感を生じてしまうかもしれない。けれども、当事者にその判断を委ねるにしても、どのような年齢になればそれが可能なのか。そして、そんな重要な決定を未成年に負わせることが倫理的に正しいことなのかも疑問が残る。

性同一性障害にしても、医療技術や法制度が整ってきたことで、さらなる事態も生じている。思春期以下の当事者に対してどのような対応をしたらよいのか、という問題だ。そもそも生物学的に原因がわかっていないがゆえに、どの状態をもってして「性同一性障害」であるかを判定するかは明確ではなく、また、そうした診断によって不可逆的な医療措置をしてしまうことは、とくに成人に達していない者には深刻な事態を招きかねない。身体が成熟してしまわないうちに医療的な処置をしたほうが、当事者が生きやすくなる場合もあるが、そのことが大いなる判断ミスにもなるのだ。

かつて、ジョン・マナーの学説が支配的だった時代には、性の意識は幼年期であれば身体的、精神的に操作を加えれば、その方向で安定すると考えられていたようだが、その後、そうしたジェンダー決定論は覆された。例えば、男性に生まれながらも、幼年期に性器の事故などで、身体を女性に形作られ、女性として育つことを期待された人が、実は心のなかで男性としての意識を否定できなかった事例などが明らかにされたのだ。彼のなかでは、外形や教育などでは性別意識は変わらなかったのである。ことほどさように、性別アイデンティティとは何か、についてはまだよくわかっていないのが現実だろう。

そうした過程において、机上の空論ではなく、現実の人間関係の機微を繰り込みながら性の問題を考えさせてくれる本書は、実に有益な資料になりうる。網羅的で、ていねいな取材は一級のルポルタージュといえるだろう。

（作家 伏見恵明）

5 / 6 (月)

14:00~16:30

HIVとカミングアウト &映画 『Hope of Love』上映会

【内 容】

- 1) HIV 陽性だと打ち明けられたあなたへ
- 2) 医療の現場から見たカミングアウト
- 3) カミングアウト経験を語る
- 4) 映画『The Hope of Love ~愛のみまもり袋~』上映

【会 場】家の光会館 7 階コンベンションホール

【主催・問い合わせ先等】

参加費／無料（事前申込み不要）。

主催：特定非営利活動法人ぷれいす東京、特定非営利活動法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス。

後援：鳥居薬品株式会社。

問合せ先／〒162-0045 東京都新宿区馬場下町60 まんしょん早稲田 401 特定非営利活動法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス

TEL 03-6233-7023（平日13:30～19:30）

FAX 03-6233-7024

E-mail: info@janppplus.jp

URL http://www.janppplus.jp/project/domestic_network/

▶▶ 5月18日（土）10:30～17:30 ◀◀

LGBTQ レイプサバイバー サポーター養成基礎講座

【内 容】「ジェンダー規範が出来るまで」諸橋泰樹（フェリス学院大学）、「LGBT と性暴力」岡田実穂（RC-NET）、「世界のトランスジェンダーを取り巻く環境」東優子（大阪府立大学）、「学校での LGBT 対応」野坂祐子（大阪大学大学院）、「事例検討」宇佐美翔子（LGBTQQ アドボケーター）、フロアディスカッション。

【会 場】日本性教育協会（JASE）資料室
（東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビルB1）

【主催・問い合わせ先等】主催／RC-NET

参加費／9,000 円（事前振込、郵便振替口座 00980-8-194971 レイプクライシス・ネットワーク）。

対 象／「LGBT 等に対する性暴力」に興味関心があり、支援の意思がある方。

申し込み／申し込みは、氏名／所属／連絡先／終了後の交流会（別途会費制）参加の有無を記載してメールで RC-NET へ。

また、問い合わせも等もすべてメールで。

E-mail rc-net@goo.jp URL <http://rc-net.info>

6 / 2 (日)

10:30~16:20

平成 25 年度 第11回思春期保健相談士 学術研究大会

【内 容】

基調講演「働くことと子育て」辰巳渚（(社)家事塾）、特別講演、一般学術演題報告、ほか。

【会 場】マツダ八重洲通ビル（9階マツダホール）
（東京都中央区八丁堀1-10-7）

【主催・問い合わせ先等】主催／（社）日本家族計画協会

参加費／10,500 円（税込み）、演題発表者は7,350 円（税込み）。

定 員／200 名。

受講資格／思春期保健相談士（上級含む）、保健師、助産師、看護師、養護教諭、看護教諭、教職員等（その他の職種の方の参加ご希望は、事前にお問い合わせください。）

問合せ先／（社）日本家族計画協会 研修課

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町1-10 保健会館新館

TEL 03-3269-4785 FAX 03-3267-2658

6 / 22 (土)

9:00~17:30

日本「性ところ」関連問題学会 第5回学術研究大会

【テーマ】「アディクションとセクシュアリティ」

【内 容】講演「アディクションとセクシュアリティ」松下年子（横浜市立大学）、「おたくのセクシュアリティ」斉藤環（佐々木病院）、「自傷する女たち——現代社会における女の生きづらさ」上野千鶴子（ウィメンズアクションネットワーク）、シンポジウム、ほか。

【会 場】ホテルメトロポリタン（東京都豊島区西池袋1-6-1）

【主催・問い合わせ先等】主催／日本「性ところ」関連問題学会

参加費／一般：事前5,000 円、当日6,000 円。学生：事前2,000 円、当日3,000 円。

問合せ先／〒171-0021 東京都豊島区西池袋1-2-5 医療法人榎本クリニック 日本「性ところ」関連問題学会第5回学術研究大会事務局（担当：山崎・中嶋）

TEL 03-3982-5345 FAX 03-3982-6089

E-mail sei-kokoro1@enmoto-clinic.jp